

奈城京東市跡推定地の調査

第18次発掘調査報告

昭和62年

奈良市教育委員会

(表紙)

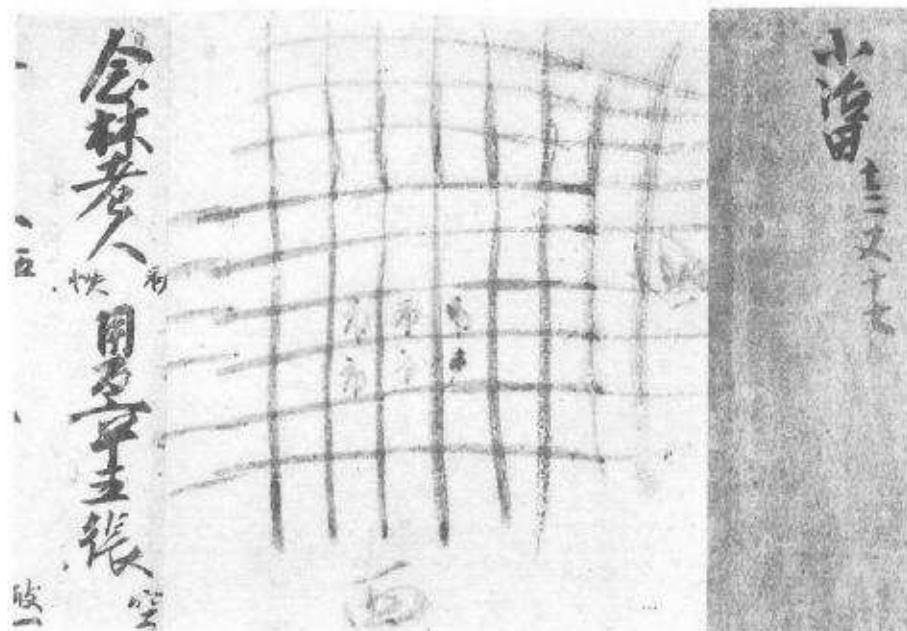


fig. 1 平城京市指圖（京都知恩院所藏『写経所紙筆授受日記』紙背）

序 文

奈良市教育委員会が、平城京の経済の中心ともいるべき東市跡推定地の発掘調査を開始して以来6年が経過しました。調査次数も今年で第8次調査となりました。これまでの発掘調査では、市域推定地のまわりを囲む道路とその側溝、築地痕跡、物資を運ぶために利用されたと考えられる東堀河、そして木橋、複数の建物跡や井戸跡などを検出するなど調査成果にも多くの進展をみることができました。今回は市域推定地の北西部の六坪に相当する部分を発掘し、新たな知見を得ることができました。

これも、土地所有者である松田憲二氏をはじめ地元農家組合の皆様方の御理解、御協力の賜と深く感謝いたしております。また、調査遂行にあたって御尽力いただいた奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会のみなさまに御礼を申し上げます。

昭和63年3月31日

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一

例　　言

1. 本書は、昭和62年度に奈良市杏町586、581-1において実施した平城京東市跡推定地内（左京八条三坊六坪）の発掘調査の概要報告である。

1. 調査次数、調査期間は次のとおりである。

62年度 第8次調査 昭和62年10月21日～昭和62年12月25日

1. 調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化課（課長・館野和己）が実施し、三好美穂、森下浩行が担当した。なお、補助員として、松田光広、相原嘉之が参加した。

1. 調査にあたっては、地元農家組合および松田憲二氏から、調査地の提供をはじめ数々の便宜を受けた。記して感謝したい。

1. 本書の作成および挿図の掲載にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、京都知恩院より協力を受けた。記して謝意を表したい。

1. 本書の執筆は、三好、森下が共同して行ない、三好がこれをとりまとめた。

目　　次

1. はじめ	1
2. 検出遺構	4
3. まとめ	10

図　版　目　次

fig 1 平城京市指図	表紙裏	fig 10 南発掘区全景（東から）	7
2 六坪の検出遺構	1	11 南発掘区全景（南から）	7
3 市域推定地周辺の地形と条坊	2	12 北発掘区全景（北から）	8
4 発掘区の位置	3	13 北発掘区全景（西から）	8
5 調査風景	4	14 S B165（南から）	9
6 南発掘区北壁土層図	4	15 S X168（西から）	9
7 建物模式図と柱掘形断面図	5	16 S X169（東から）	9
8 検出遺構平面図	5	17 六坪の占地	10
9 S X168平面図・断面図	6		

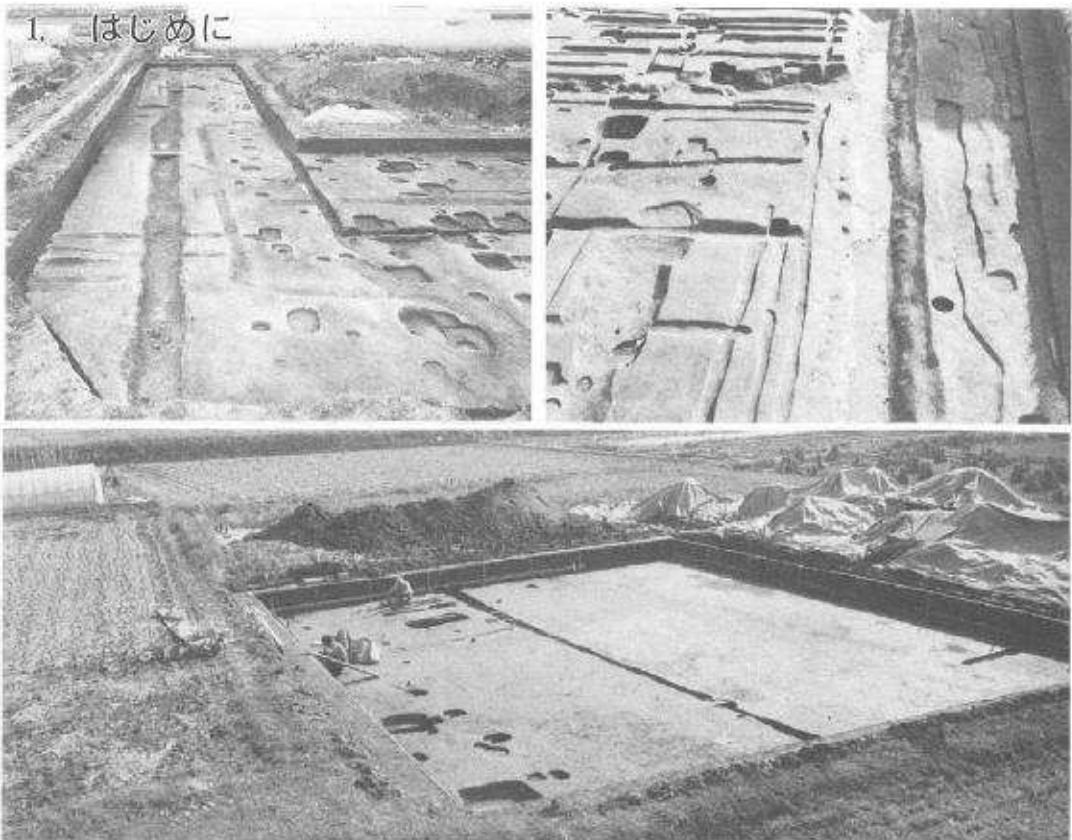


fig. 2 六坪の検出遺構

平城京東市跡は、奈良時代の経済活動究明のための重要な遺跡として多くの研究者に注目されてきた。東市の正確な位置及び範囲については諸説にわかれるところだが、最近では東市は左京八条三坊五・六・十一・十二坪の4坪分にまたがっていたという考えが有力になりつつある。

こうしたなかで、奈良市教育委員会が東市跡の範囲確認調査を、国の補助金を受け昭和56年度以来継続して実施してきた。^{注3)}第1次～第4次調査では、市域推定地北辺部を重点的に調査し、第5次～第7次調査では、東辺、西辺、中心部と調査をすすめてきた。これらの調査では、坪の縁辺部を画す道路とその側溝、築地痕跡、物資を運ぶために利用されたと考えられる東堀河とこれに架けられた木橋、市域推定地中央部の交差点、複数の建物跡や井戸などを検出している。奈良時代の遺構だけではなく、平安・鎌倉時代の遺構も検出しておる、中世「辰市」の実態を究明するための好資料を得ている。このように徐々にではあるがこの地の様相が明らかになってきている。しかし、東市の存在を裏づける確証はまだ得られていない。今後の継続調査の成果と文献史料の側面からの検討といった包括的な研究調査をすすめ、解明していくかねばならない問題であろう。

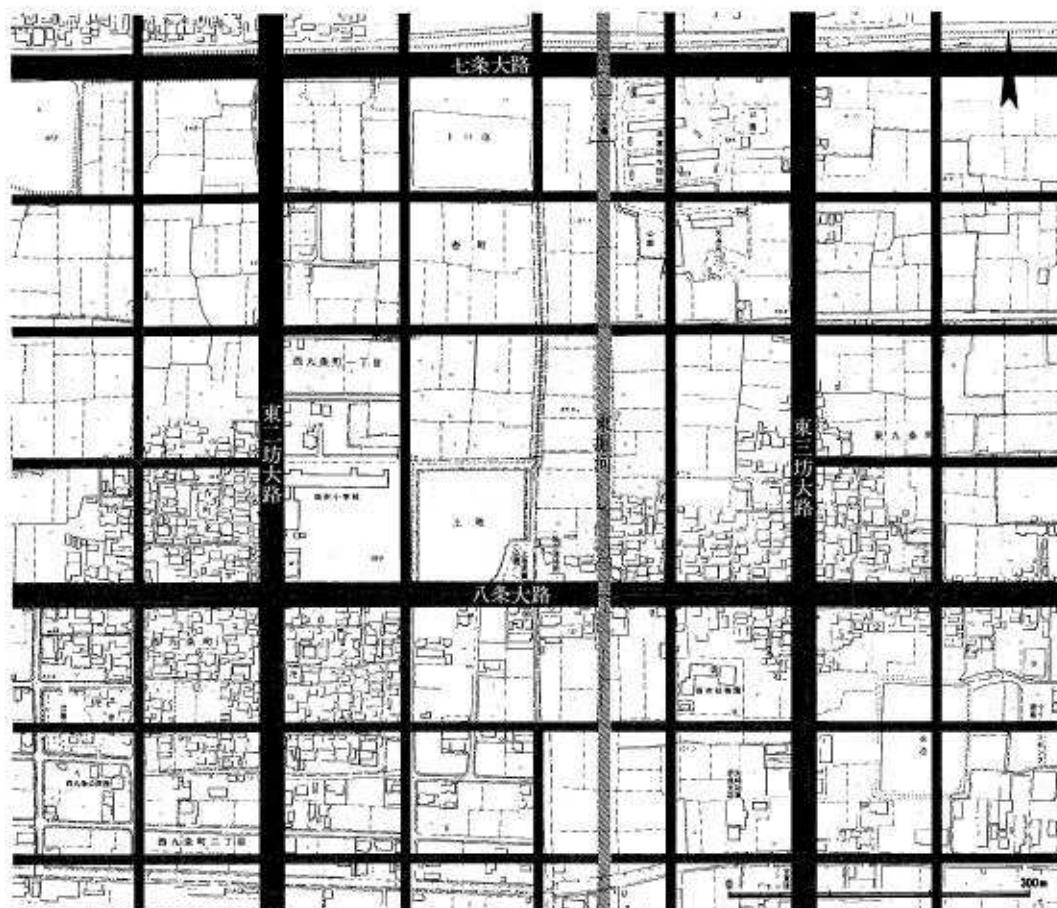


fig. 3 市域推定地周辺の地形と条坊

調査地 今回の調査地は、東市跡推定地北西隅の坪の中央部にあたり、平城京条坊復元によると左京八条三坊六坪に相当する。推定地坪内の調査はこれまでに第5次及び第6次調査で実施しており、いずれも複数の建物や井戸を検出している。その成果をふまえて今回の調査にはいった。調査は、六坪の利用実態を確認することを主目的として、坪の中央部の水田に東西15m、南北16m（発掘面積240 m²）の南発掘区を設けた。調査の結果、調査当初の予想とは大幅にくいちがい、奈良時代の遺構は掘立柱建物1棟を検出しただけで他には検出することができなかった。六坪の中心部付近には遺構がどの程度存在していたのかを確認するために南発掘区の北西に位置する水田にさらに東西5m、南北10m（発掘面積50 m²）の北発掘区を設定。調査期間は、昭和62年10月21日～同年12月25日までである。

注) 奈良市教育委員会「平城京東市跡推定地の調査Ⅰ～V」1983～1987

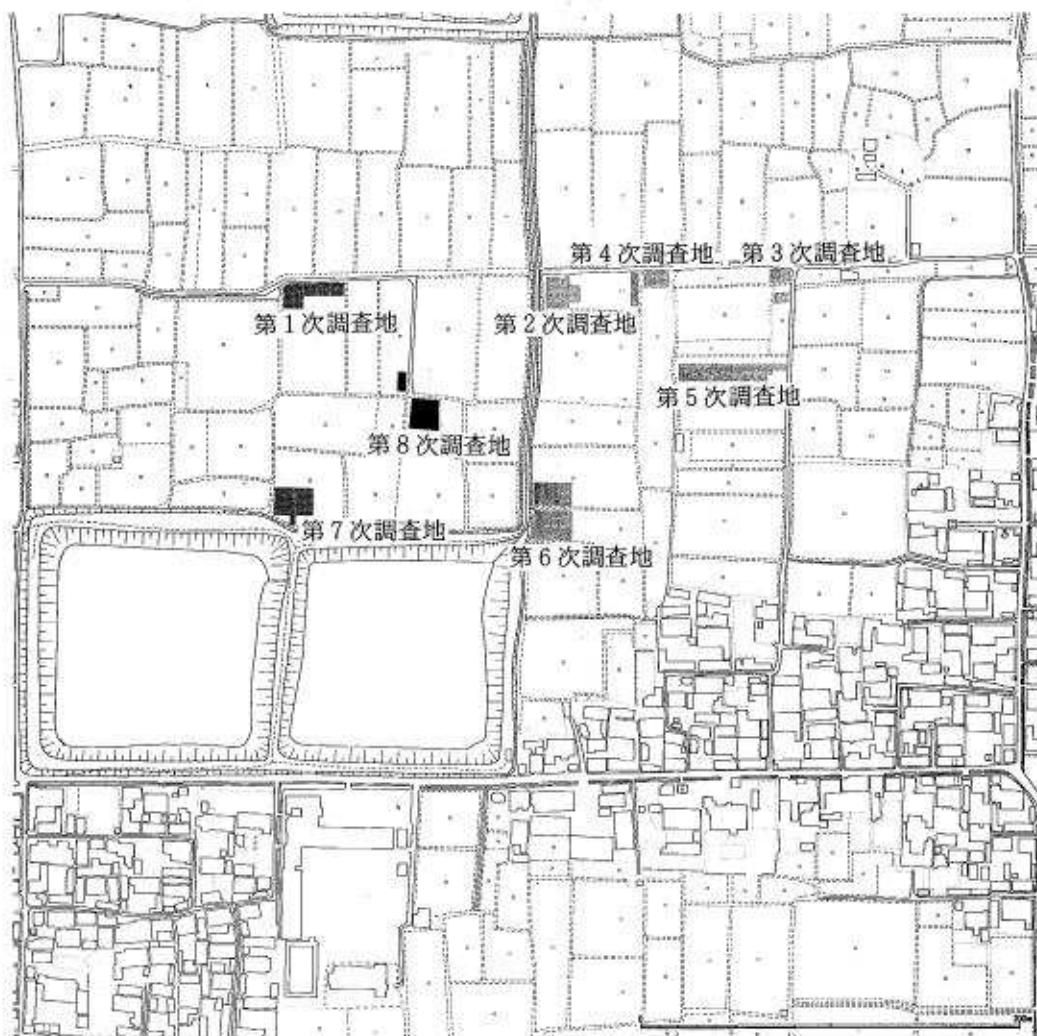


fig. 4 発掘区の位置

調査日誌

- 10月21日 南発掘区（240 m²）を設定。耕土の排除を開始す。
- 10月22日 測量用基準点を設定。
- 10月27日 遺構面まで掘り下げ終了し、遺構検出を開始する。
- 11月 6日 発掘区全景、細部写真撮影。遺構実測を開始する。
- 11月 9日 北発掘区（50 m²）を設定。耕土の排除を開始する。
- 11月10日 遺構面まで掘り下げ終了し、遺構検出を開始する。
- 11月11日 発掘区全景、細部写真撮影。遺構実測を開始する。
- 11月17日 地元住民対象の現地見学会を開く。
- 11月18日 遺構養生の後、埋め戻し開始。
- 12月25日 埋め戻し完了。道具撤収。

2. 検出遺構の概要



fig. 5 調査風景

堆積土層 南発掘区内の基本的な土層は、耕土の下に鉄分を多く含んだ淡茶色砂質土、茶灰色砂質土と続き、地表から40~60cmで黄褐色粘土の地山となる。発掘区東半部では、耕土と地山の間に砂の堆積（厚さ約40cm）がみられる。発掘区東南隅では、砂の層の下に約20cmの厚さの灰色砂礫層が堆積していた。一方、北発掘区の上層は、基本的には南発掘区と同じで、耕土の下、淡黄灰色土、茶灰色砂質土と続き、地表から30~40cmで黄褐色粘土の地山になる。地山上面の標高は南発掘区が55.4m、北発掘区が55.6m前後である。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出遺構 検出した遺構には掘立柱建物、土塙墓、土塙、素掘り溝がある。

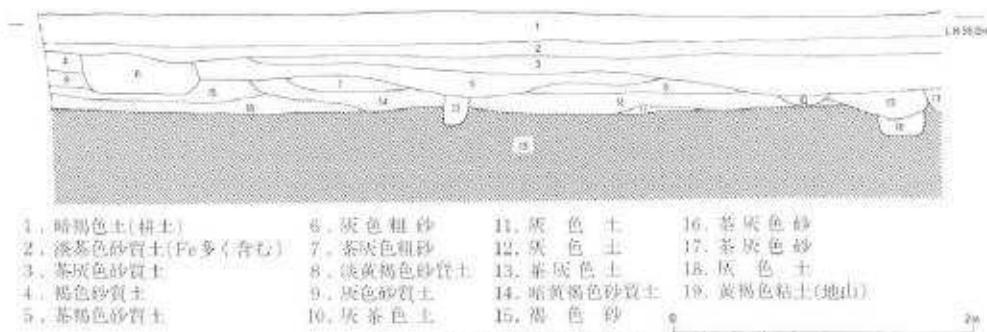


fig. 6 南発掘区北壁土層図

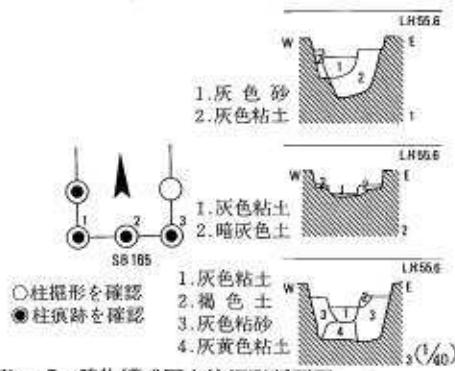


fig. 7 建物模式図と柱掘形断面図

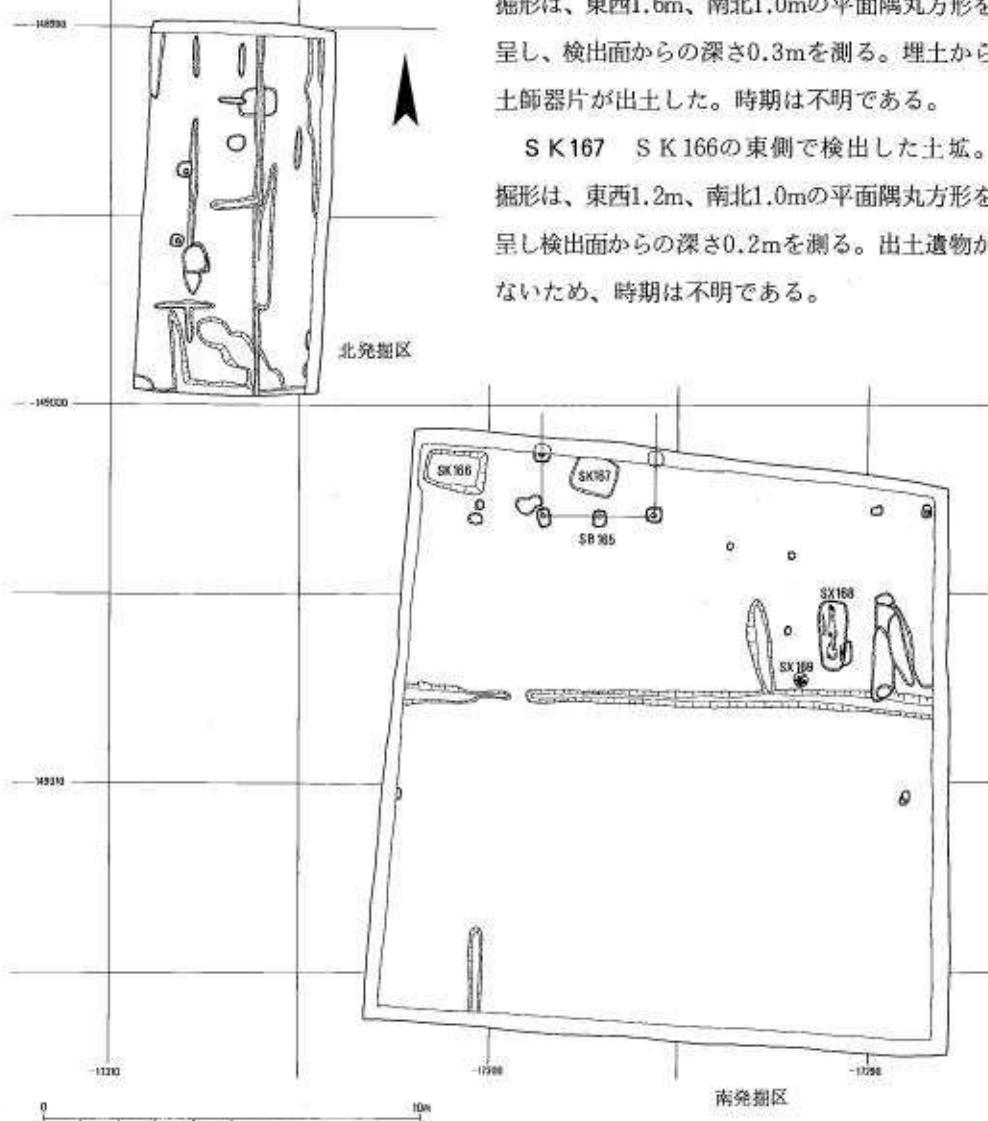


fig. 8 挖出構造平面図

S X168 南発掘区北東で検出した木棺直葬墓。主軸は南北。墓塚は長さが1.83m、幅が北端で75cm、南端で57cmであり、北の幅がやや広い平面隅丸長台形を呈する。深さは北で22cm、南で27cmである。北の幅が広いこと、北の底面が高いことから、埋葬頭位は北枕と推定することができる。南半部では不整円形にさらに掘りくぼめる。その部分は、南北94cm、東西59cm、墓塚上面からの深さは36cmである。また、それは、脚方向にあることや木棺の底板がその上面を覆うことから、木棺の排水施設の可能性がある。木棺は残存状態が良くないため、全形を知ることはできないが、箱形木棺（寝棺）であると考えられる。底板、側板は一部が残る。蓋板はくずれ、底板と重なった状態でわずかに残存していた。およそ長さ1.6m、幅55cmに復元できる。なお釘、鍛などは使用されていなかった。出土遺物には土師器小皿、砥石がある。土師器皿は墓塚の北壁に接して横転した状態で出土した。棺外の副葬品であろう。砥石は木棺のほぼ中央で底板に接した状態で出土した。おそらく棺内の副葬品であろう。土師器小皿の型式から、江戸時代の木棺墓であることがわかる。市内での江戸時代の墓の検出例は、現在の油阪町・西之阪町近辺で多く知られており、藏骨器、棺桶、箱形木棺（座棺）などがみられるが、大部分は藏骨器、棺桶である。S X168のような箱形木棺（寝棺）例は他に、調査地南側の八条大路の調査で、墓塚の形態から箱形木棺と推定されたものがあるだけである。

S X169 S X168の南西で検出した円形土塚。直径36cm、深さ10cm。土塚内には小砾が敷きつめられていた。

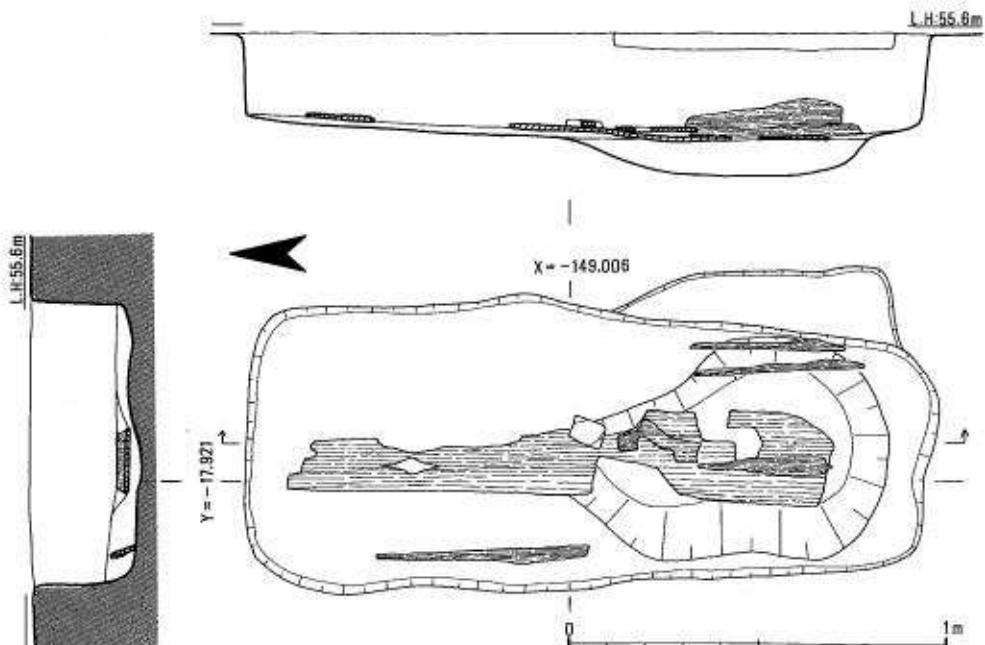
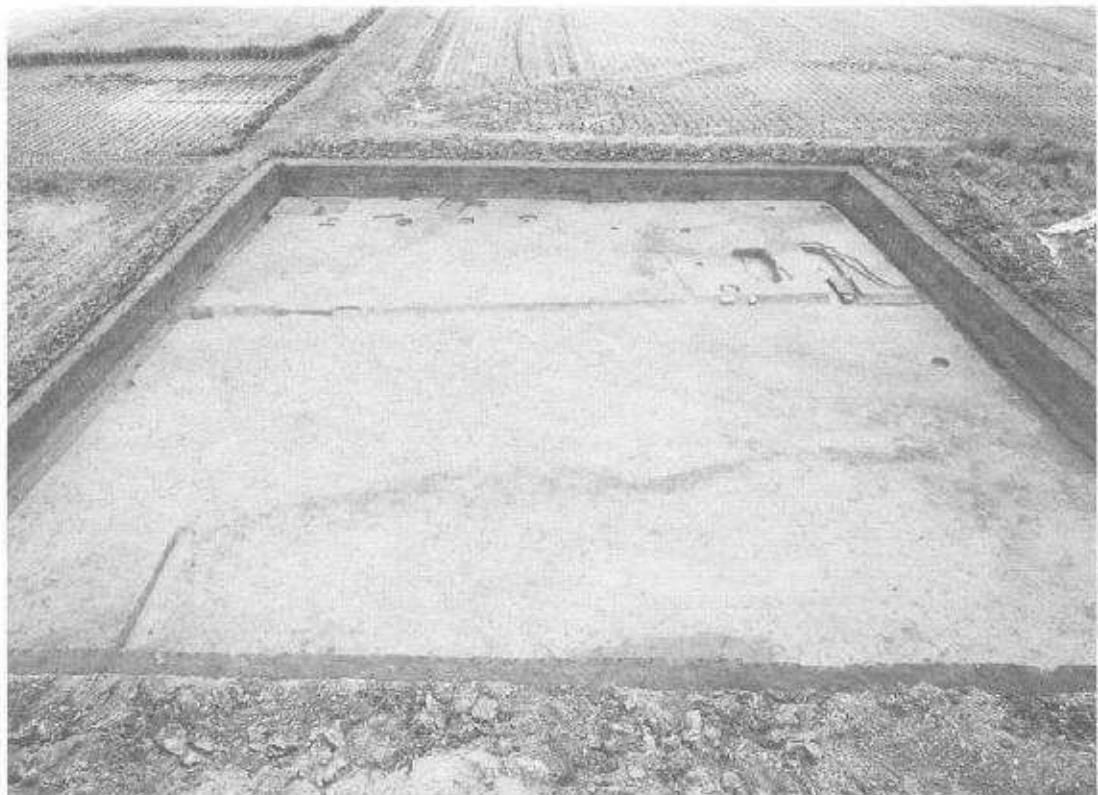


fig. 9 S X168平面図・断面図



fig.10 南発掘区全景（東から）



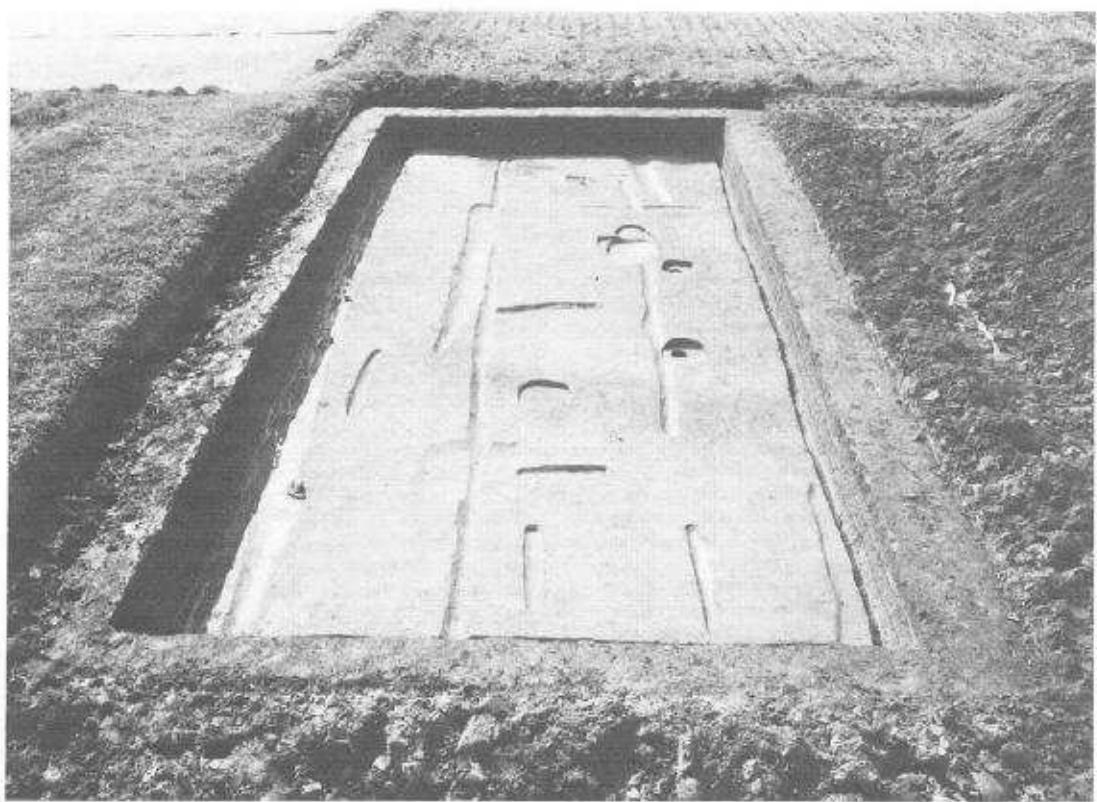


fig.12 北発掘区全景（北から）





fig.14 SB165 (南から)

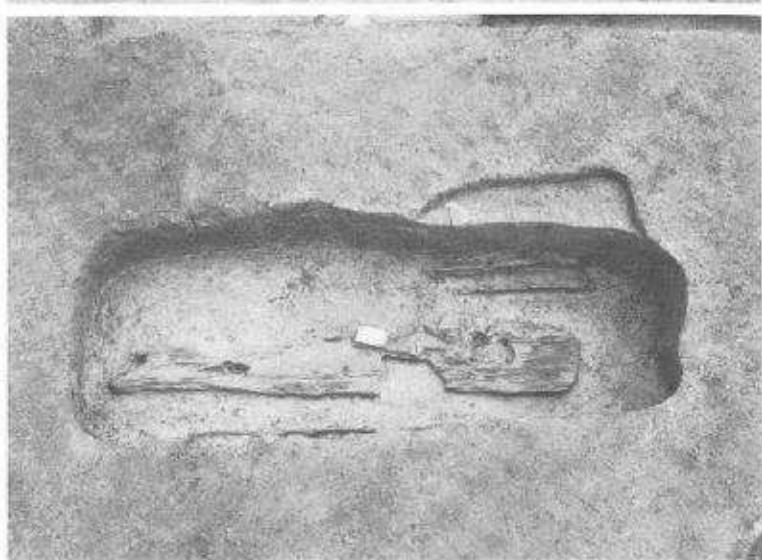


fig.15 SX168 (西から)



fig.16 SX169 (東から)

3.まとめ

今回の調査成果は次のとおりである。

1. 六坪の中心部には建物が一棟あるのみで他には顕著な遺構を認めることはできなかった。残存する遺構の状態からみて遺構が削平された可能性は低いと考えられる。

2. 出土遺物がほとんどない。

以上の2点に要約できる。これらの事実をもとに奈良時代当時の六坪中心部の様相を復元すると、小

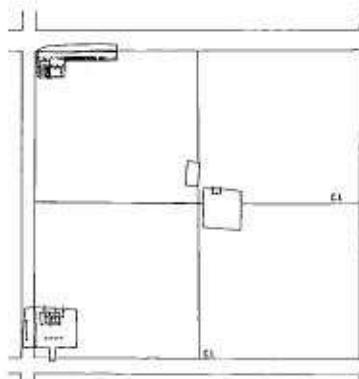


fig.17 六坪の占地

規模な建物が1棟建つ時期はあるものの、あとは空き地になっていたものと思われる。遺物も遺構面を覆う遺物包含層から土師器、須恵器片が若干出土しただけで、日常生活に使われていたと考えられる土器類の出土がほとんどない。このように今回得た調査成果は、従来の一般宅地内の調査成果とは違った様相を呈していたことがわかった。

今回の調査では、空き地の範囲及びその性格までは明かにすることはできなかったが、以上の成果から考えられる可能性を2点指摘しておきたい。

1つは、六坪中心部が閑散としているのはたんなる建物と建物の間の空き地であったということ。

2つめは、広場としての機能をもつ空間であったということである。

平安時代の史料となるが、『延喜式』によると、当時の市場には市司の院があり、その中には「南庭」と称する広場が存在している。この史料は、奈良時代の市場の様子を知るうえでも重要な手がかりとなろう。今回検出した遺構が市司に関わるものか否かは判断できないが空き地が広場として利用されたことが明らかになれば当該地は市域としての可能性が高まることはいうまでもない。いずれにしろ、六坪中心部付近には建物が少ないという事実を考慮して、隣接地での厳密な調査を行うべきであろう。

また、市域推定地内において近世墓を検出したのはこれが初例で、当時の埋葬の形態を知る上で貴重な発見であったといえる。近世には調査地周辺が墓地として利用されていたかは定かではないが、今後の検出例の増加を待って検討したい。

最後に、昨年度行った第7次発掘調査の概要報告で市域推定地を囲む条坊道路の推定交点座標を求めているが、そのうちの2点、推定地南辺を画す道路と、東・西辺を画す道路との交点座標を誤って記載しているので以下のように訂正する。

C (X = -199,203,166 Y = -17,371.791) D (X = -199,202,076 Y = -17,105.699)

注) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査V』1987 (10~12頁のうち) 12頁7行目

平城京東市跡推定地の調査 VI
第8次発掘調査概報

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会

奈良市二条大路南1丁目1-1

印 刷 共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社

奈良市三条大路2丁目2-6

